
古今プラチナ

小林 太陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

古今プラチナ

【Nコード】

N3517R

【作者名】

小林 太陽

【あらすじ】

詩集です。（作者の視点は偏っているように見えますと思いますが、これは神話的な視点です。白銀のところで書いています。）

鎮魂

徳もなにも使い果たしたよ

御魂は粗ぶつて淀んで

華は幾多に咲き乱れたその裏で

幾千にも我ら同胞を忘れ

肉は旨き時に 無限に寂しき日

白銀が荒魂になりそうだよ

龍の瞳 C o r n a のサイン

根は広がらず常世の闇で

一人一人に試される中で

霊は寒く 空見て笑うだけ

人が鎮魂歌を歌い始めるのは
きつともうすぐなのさ

人が鎮魂歌を歌い始めるのは
きつともうすぐなのさ

太陽が僕の前にただあつてよ
生まれたときからずっと

月には微塵にも気付けんで

二人は一人を忘れてて

愛は苦く 現世で離ればなれ

あの日投げたのさ

あの日投げたのさ

僕は空に石を 大きな石を

夏の日投げてしまったのさ

人が鎮魂歌を歌い始めるのは

きつともつすぐなのさ

人が鎮魂歌を歌い始めるのは

きつともつすぐなのさ

鎮魂（後書き）

鎮魂とは魂を静めることを言います。

燕呪

月を見捨てた女が

半狂乱になつて

僕の胸を何度も叩いてね

胸に刺さる電のような

ドロドロ汚濁した悲しみの嵐

きつと母さんに見捨てられたと思つてるんだ

きつと母さんに見捨てられたと思つてるんだ

太陽に盾突いた男が

憎しみに塗れて

僕の背中に何度も唾吐いてね

服にベトリと糞のような

ギスギス汚濁した怒りの調

きつと父さんに見捨てられたと思つてるんだ

きっと父さんに見捨てられたと思ってるんだ

その二人の女と男が 僕の前で絡みつく姿

接吻 憎しみ 怒号 蛇のように

その血みどろから生まれた

その血みどろから生まれた

その僕は呪われているに違いないのさ

燕が低地を飛んでゆく

燕が天空に舞い上がる

雨がふる にわか雨か何か

昼は太陽 夜は月

燕はいつか返ってゆく

あの青い空に

あの青い空に

燕呪（後書き）

燕呪^{えんじゆ}は造語です。イメージとしては燕尾服を着た公人のこの世における心象風景です。

自決

闇の淵

光求めぬ

人の群れ

鋒鋦の先へと

我消え行き

蛇園

おまえが欲しい

おまえが欲しい

蛇が絡みつく血の池で

快楽に呻き居る魑魅魍魎

その顔はドロドロに溶け

その言葉は人外の轟で

悔やむことない恨みが満ちている

あなたが欲しい

あなたが欲しい

体液が迸るシーツの上で

纏わりつく襞の洞窟

見たくも聞きたくもない

不和満ちゆく死気の流れ

慄き浸る悦に化粧は意味為さず

贖罪なき獣の宴

赤い空気 嫉妬と侮蔑と憎悪と

雷鳴から逃れ闇へと混沌す

跋扈す魑魅魍魎

跋扈す魑魅魍魎

蛇の園に秩序あらんことを

陰陽の光とともに

アーメン

蛇園（後書き）

蛇園だえんは造語です。蛇の暮らす庭園のことです。

聖域

言葉にできない気持ち

白い光が私を包み込む

私はあなた

あなたとともに

私は生きる

「私は何もいらない」

そんな気持ちではなく

何もが在る　ただ全てが今に

永遠に　その中心に

光がある　愛が満ちている

生と死が一つになり

私は私を真に知る

私は私だったのだ

私は私だったのだ…

涙こぼれる至福の中で

全てが私になり

私は全てになり

光の中に溶け込んでゆく

忘れられていた聖地

地 水 火 風 光…

そこは白銀の世界

あなたが誰なのか

あなたが誰なのか

私は知っている

いついかなるときも永遠に

聖域（後書き）

天使の視点より。

希望

白い鳩 三つ葉のクローバー
転がった缶ピース
祖父との絆 それは慈悲

愛してくれる人は傍にいない
傍にいるのは愛している人
強く愛するには勇気がかかせない
深く愛するには練磨がかかせない

何もかもが上手いかわなくても
地上に絶望してはならない
夢は実現させるもの
現実には独りではやってはこない

愛はするもの
希望はそれを支えるもの
すなわち故人との絆
御魂を受け継ぐもの

水たまり 映る顔
空になった缶ピース
それは祖母の微笑み

天空で見守る 二人の希望
それは本当は傍にあるもの

恋情

暗号で綴る恋文
伝えたい二人の秘密
形にできない想い
秋の時雨

ベランダの片隅
不思議な丸い雲
金色の音色
山へ帰る鳥たち

触れたい唇
拒んだ茶の瞳
場違いな空気
嘘つきなレモンの味

掴んだその肩
抱きしめるたび
D u l t o n にミルク
コーヒーはブラック

身体は僕のもの
心はあなたのもの
閉ざされた古城
月は見つめやしない

追憶

道行く先に夢見た
少年は駆け巡った
夕陽照らす草原を

真つすぐ見つめる
少女は永遠とわに
手を伸ばす老人

祖母は言つた
太古の智慧
祖父は見せた
未来の時を

全てが生きていた
あの日あの時
心分かち合い
抱きしめあつた

ふるさとが
みんなが
笑っていた

もう戻れない
もう戻れない
少年は泣いた

一人にしないで

一人にしないで
少女は泣いた

祖母は笑った
幾つかの涙と共に
祖父は喋った
新しい希望を

全てが悔やんだ
あの日あの時
心寄せ合い
別れを知った

鳥は生まれ
空を飛び
天になった

あの夕陽とともに
あの夕陽とともに

歴史

何もかもが生きている
輝かしく光っている
満ち足りた光の世界
未知が怖かったあの頃
それは好奇心に変わって
一瞬一瞬の今に
全ての感覚が流れ込み
私は世界を体験した

何もかもが死んでいる
物の怪が呻いている
霞みがかった闇の世界
全てを知ってしまった今
それは追憶に変わって
過去と現在と未来が
全て一つになって
世界は私とともに沈黙した

私は私を忘れていた
現実とは夢だった
夢とは現実だった

業の清算
徳在りし幸福

私は私を思い出した
私は遥か彼方から生きていた

空には太陽が輝いていた

聖母

母は言った

「あなた鍛錬が足りないのよ」

私は何のことか分からなかった

そのたびに母は笑った

私は馬鹿なのだろうきつと

久しぶりに母と会った

母は私を見守っていた

彼女は私を知っていた

彼女は私が何者なのかを知っていた

ある日試験があると彼女は言った

私は何のことかさっぱり分からなかった

私は風邪をひいて寝込んでしまった

熊がころされてしまったらしい

次の日私は気付いた

私は何者なのか

私は何なのか

私は…あなただったのだ

この時代に

あなたと会えたこと

それは奇跡だ

それは幸いだ

病は気から

それは母への感謝が足りぬから
大自然は美しかった
それは母に似ていた

聖母は笑った

そしてただただ私を聞いていた
私の顎には白いひげが生えていた
彼女はそして文殊になった

性愛

鎖骨に舌を這わせて
口が歪んで小指が動くリズム
舌を胸から臍へ下して
吐息が激しく照りつける
嗚呼 シャンデリア

煮えたぎる越境 焦らせば
恥肉に濡れる舌 下に
くるぶしまで落ちて落ちて
甘く噛みつく 唾液を絡ます
口は尖って 瞳開いて

背を向けさせた 僕は
麓から頂へと
繰り返して 繰り返して
耳元まで愛を這わす
溜息 壁にクリムト

揺れる風 それは和音
表から見上げて 君を見つめる
接吻交わす瞳に雫
心抱きしめて 心抱きしめて
僕は繰り返し突き離す
膨らむ空間 永遠の時間
呻き声 ざわめく髪
千切れるほど握るシート
赤い光 爆発して

鏡に映る二人の合図

嗚呼 神

それは全て

全ては一つ

全ては一つ

全ては一つ

記憶が飛んだ

君は飛んだ

僕は空になった

君は最高のアート

僕だけのアート

心象

ぼくのいるおうちには

だれもこないの

ぼくのすんでいるおうちにきたひとは

ほほいないの

パパもママもきたことがないの

いちどもないの

だれかがすんでいるおうちに

なんどもおじゃますることがあったけど

ぼくのすんでいるおうちにくるひとは

いつもいないの

ぼくはみんなのおうちにいくこと

いくことはできるけど

ぼくのすんでいるおうちに

だれかがくることはないの

だからぼくはもうだれかのおうち

みんなのおうちにもいきたくないの

ぼくのおうちにはなんにもないの

ぼくのおうちにはかがみがあるだけなの

おうちをのぞいたひとは

かがみにうつつたじぶんのかおにびっくりして

よろこんだり いかつたり

かなしんだり たのしんだりして

まんぞくしたり ふまんをもつたりして

みんなかえっていくの

だからぼくのすんでいるおうちにくるひとは
いつもいないの

だからぼくはだれかのおうちにいくときは
そのだれかのおうちにある

よろこびや いかりや

かなしみや たのしみを

おなじものをこしらえて

おなじふくをきて

おじゃましにいかなきゃならないの

でもぼくはふくをきるのがすきじゃないの

それはぼくじゃないからなの

うそっぽいっていわれるのがいやなの

だからぼくはもうだれかのおうち

みんなのおうちにもいきたくないの

心象（後書き）

文中の“鏡”は覗いた者が覗かれるという不思議な鏡です。

招魂

友人が亡くなってから

ただ悲嘆に暮れていた

その夜私の元に一つの魂が来られた

私は哀しみに筆を走らせた

その魂にとりつかれたままキャンバスを染めた

ある晩コーヒーを飲んでいると

一つの女の魂が来られた

私はパソコンの電源を入れて

キーボードでリズムカルに言葉を刻んだ

二日後その人は誰かの目に留まった

二人の兄弟と他愛もない話をしていた

話が深まるごとに私とシンクロして

私とシンクロした魂たちが

兄弟が帰ったあとの部屋に居座った

私は彼らに歌を歌い祝福した

阿吽

一本の川

一本の川

左の岸に男

右の岸に女

真中に一本丸太の橋

男は大地を駆け巡り

狩りに出た

女は洞窟で子育て

家を守った

家に兎を持って帰ってきた男

女に「あっあっ」って言った

獲物を待っていた女や子供

男に「うんうん」って笑った

ゴロゴロゴロツッ！

雷が鳴った

男も女も子供もみんな洞窟に隠れた

男は「ああああ……」と叫んだ

女は「うううう……」と泣いた

みんなで赦して下さいと

神様にお祈りした

兎の皮と骨を

大事に大事に

お守りにした

雨が降りやんだ

虹が出た

子供たちが喜んだ

男も女も喜んだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3517r/>

古今プラチナ

2011年10月3日18時59分発行